今、いのちがあなたを生きている

「人間といういのちの相」…私たちは人間として当たり前のように生きています。しかし、その与えられたいのちをどのように生きているのでしょうか。人間としてのいのちの営みはさまざまな相をとって社会に映し出されています。この紙面では、さまざまな人をとおして、人間そのものを考え、御遠忌テーマ「今、いのちがあなたを生きている」を学ぶ手がかりとしていきたいと思います。

連載 人間といういのちの相

今、葬儀を考える

―前編―

「大切な人が亡くなることはとても悲しい。でも葬儀の準備は大変だし、お金もかかる。お勤めの意味もよくわからないし…。葬儀って本当に必要なのだろうか？」

人間の生活が合理化という潮流に飲み込まれていく中で、葬儀本来の意味が見失われつつある。しかし、人類の歴史を振り返れば葬儀は人間にとって非常に重要な意味があると、大谷大学の門脇健先生は訴えます。今号から二回にわたって、葬儀とは何かということを門脇先生と考えていきます。

葬儀には、私たちの生活から失われたものを見直す重要な意味がある

――現代は、すべて合理的に物事を進めることが優先されています。

それは「葬儀」にも如実に現れているのではないかなとも思います。「家族葬」が増えているように、葬儀の形が変わってきたのはある意味で理解できますが、ただ単にすべて簡略化・合理化することがいいという思いが人間のどこかにあるとしたら問題ですね。なぜなら、そのことによっていのちの厳粛な事実といいますか、人間の生老病死を葬儀をとおして見つめることがなくなってきているのではないかと感じるからです。

門脇　そうですね。葬儀がいったいどういう場であるのか、そのことをあらためて考えるのはとても大切なことだと思います。

実は、葬儀を勤める僧侶の側も葬儀についてはっきりしないものがあるように感じるのです。学生から「親鸞聖人の教えを学べば学ぶほど、儀式がわからなくなる」、こう言われることがあります。大谷大学は、真宗大谷派の宗門校であり、たくさんの「寺っ子」が学んでいますが、彼らが親鸞聖人の教えと、月忌参りや葬儀を勤めることとどう関係するのかという疑問を抱いているのです。教養を勉強すればするほど、今まで伝統的にされてきた宗教行事というのに、どう向き合っていいのかわからなくなるというのです。

門脇健　かどわきけん

1954年生まれ。福井教区第8組善久寺住職。大谷大学文学部哲学科教授。哲学科の教員によるブログ「哲学科教員ブログ」を日々更新中。編著に「揺れ動く死と生」（晃洋書房）など、翻訳としてフロイト「トーテムとタブー」（「フロイト全集」第12巻、岩波書店）などがある。

そうなってしまう一因に、『改邪鈔』という書物に、「衆親鸞閉眼せば、賀茂河にいれて魚にあたうべし」（『真宗聖典』六九〇頁）という親鸞聖人の有名な言葉があって、聖人は葬儀をしなかったと受け取れるということがあります。また、現在では「生きている今が大切だ」ということも強調されて、死後と関わる葬儀などにどう向き合えばよいのかわからなくなっているということがあるのだと思います。

――親鸞聖人が賀茂川に流せとおっしゃった真意はどこにあるのでしょうか。

門脇　今の時代感覚から言えば、「棄てる」ということになるのかもしれませんが、当時の時代背景から言えばどうなんでしょう。たくさんの人々が病や飢え、あるいは戦乱によって命を失っていく、町のいたるところに死体が棄てられていた時代です。お弟子さんに看取られた後、わざわざ「賀茂川に流してほしい」とおっしゃった。棄てるのであれば、どこにでも放置すればよいのです。それをあえて賀茂川と。

――親鸞聖人は著作に「海」という言葉をたくさん使っておられますね。川に流すということは聖人の思いと通じるように思います。

門脇　そうですね。賀茂川に流すという行為自体が弔いだと考えられないでしょうか。つまり「水葬」です。親鸞聖人は、あれほど海がお好きだった方ですから、海につながる川に流してほしいというお気持ちがあったように思うのです。

それに、ただ放っておけと言っているのではない。賀茂川に流すという手間をかけてもらうわけですから。よくよく考えれば、命終わろうとする時に、「盛大な葬儀をしてほしい」とはおっしゃらないと思います。聖人は謙虚に、しかし「棄送」ということをきちんと考えておられたのではないかと思うのです。

私自身も、寺に生まれて、はじめは寺が嫌だなあと感じていました。「どうしてみんな葬式にお坊さんを呼ぶのだろう」と思っていた時期があります。予備校で講師をしていた頃のことですが、「なんで葬式に坊さんなんかを呼んで、高いお金を払わないとあかんの」と生徒に質問されたことがありました。私は思わず、「そりゃあ、ごみには出せんやろ」と返事をしました。その生徒も「あっ、そうやわ」と答えました。それは本当に何気ない言葉のやりとりだったのです。でも交わした言葉の中に、非常に重い意味があることを誰もが知っているのではないかと感じたのです。葬儀を考える今、それが私にとっては原点だったのです。

人間は葬送する存在

――人間にとって「葬送」とは何でしょう。

門脇　人類の歴史を振り返ってみると面白いことに気がつきます。これは有名な話ですが、二十万年前のネアンデルタール人の遺跡から彼らが死者を埋葬していたという痕跡があるということがわかりました（※）。

その事実から私が思うのは、人間が何かのきっかけで葬儀をするようになったのではなく、類人猿の中から進化の過程で、埋葬（＝葬儀）をする存在が生まれてきた。その存在が人間になったんだと考えられるのではないか。つまり、弔うことは、人間であることの基本的な条件ではないだろうかということです。

他にも、この前の戦争のことですが、人々は戦場で死んでいった兵士に対して、指の一本を切って持ち帰ったり、戦場の砂を持ち帰って遺骨箱に入れるという行為があったようです。つまり、何らかのかたちで弔いたい、葬送するということはお互いに人間として認めるということなんです。

逆に、「鬼畜」である敵の死体は放っておいた。互いに人間として向き合っていなかったということですよね。

※ネアンデルタール人は、ホモ・サピエンスの最も近い近縁種とされる。一九五〇年代にイラクで発掘されたネアンデルタール人の遺体の一つは花を添えられて埋葬されたと考えられ、ネアンデルタール人は現代人と変わらない精神構造をしていたと思われた。事実ネアンデルタール人がホモ・サピエンスとおなじように、死んだ仲間の墓を作って葬った形跡のある化石が見つかった。これはホモ・サピエンスとネアンデルタール人でしか見られない特徴である。こうして、ネアンデルタール人は進化してホモ・サピエンスになったとする説がある。

――葬送する存在、それが人間であるということですね。

門脇　人間は「死んだ」という認識ができるのです。これは動物にはない認識です。だから私たち人間は火葬や土葬、または水葬や鳥葬などをするのです。

釈尊がキサ・ゴータミーという女性に説法したという話があります。キサ・ゴータミーに子どもが授かるのですが、しばらくしてその子どもが急病で亡くなってしまうのです。彼女はその子の死を受け入れることができません。釈尊はたずね、自分の悲しみを訴えます。釈尊は「その子を生かす道がある。この村の家をまわって、人の死んだことのない家から芥子の実をひとつもらってきなさい」といいます。キサ・ゴータミーは、釈尊の教えにしたがって、今まで人の死んだことのない家を探しました。ところがどれだけ探してもそういう家は一軒もありません。しかし、不思議なことに回っているうちに、子どもが「死んだ」ということを受け入れることができたのです。生まれたものは必ず死ぬ、そういう人生の無常を釈尊は伝えようとしたのです。キサ・ゴータミーはそのことに納得して我が子を荼毘に付した。そのことで彼女は我が子と別の形で出遇うことになった。

このようなことは動物には起こりません。葬儀には、人間の条件としての非常に重要な側面というのがあるように思います。

親鸞聖人は死者とどう向き合ったか

――葬送は人間としての必要で大切な行為なんですね。

門脇　葬送することを哲学者のヘーゲルは、「自分たちの手でもう一度殺し直す」と言っています。この行為は、生きている者と死者とが交流できる世界を開くということです。

親鸞聖人も、そのような世界で死者の声を聞こうとされたのだと思います。例えば、私たちが日々お勤めをしている「正信偈」には、龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空（法然）の七高僧のメッセージがまとめられています。

これは、死者（七高僧）が自分にどういう言葉をかけようとしているのか、それを偈にされ、死者に歌いかけられたのです。死者の声が今どういうふうに聞こえてくるのだろうか、また聞くべきだろうか、聖人にはそういう発想があったと思うのです。そういう歴史観を持っていた。過去からどうやってつながってきたのか。過去は死者がつくってきた。その死者からの声を聞くことで、歴史はつながってくる。聖人の言葉で言えば、「後に生まれん者は前を訪え」（『真宗聖典』四〇一頁）ということです。訪ふという言葉は、当時の言葉としては「弔う」と同じ言葉です。死者を訪ねるということは、弔うということなのでしょう。

先にお浄土へ還られた方が、どのように今私に声をかけようとなさっているか。そのことと向き合うことが葬儀であり法事であると思うのです。

――なるほど。実は親鸞聖人は葬送ということを大事にされていたのですね。

門脇　御遠忌は、そういう意味でも一つの重要な契機だろうと思います。親鸞聖人が他者にどうやって向き合ったのかというのが大きなテーマになるのでしょう。「遇う」ということですよね。

――しかし、むしろ現代では葬儀が軽んじられている場面も多いですよね。

門脇　現代は、人間は病院で生まれて病院で死ぬことがほとんどです。そしてそのまま火葬場へ運ばれる、いわゆる「直葬」ということも多くなってきています。

例えば、それが今の子どもたちの目にどう映るのか。この前まで見かけていた近所のおじいさんが、気がつくといつの間にかいなくなった。後でもう亡くなっていたことを知る。大人たちがいつの間にか消えてしまう、そういうことが普通にあるのです。

つまり、生老病死が日常生活の外へ押し出されてしまっている。私たちの生活の邪魔をする「老」「病」「死」は、できるだけ簡単に合理的に処理するという考え方が一般化しているということですね。

――近代の合理化ということが人間の大事な部分を削ぎ落としている。特に「死」と向き合うことがなくなっています。それが葬儀に象徴されているのですね。

（次号へ続く）

【お詫びと訂正】先月号表紙の和田稱氏の言葉に誤りがありました。正しくは「病む身をば病むに任せて現前のいのちの問いに生きなんとする」です。ご遺族をはじめ読者の皆様に深くお詫び申し上げます。東本願寺出版部

2011年に法蔵館は創業400年を迎えます
〒600-8153 京都市下京区正面通烏丸東入ル Tel. 075-343-5656 Fax. 075-371-0458
法藏館
http://www.hozokan.co.jp 表示価格は税込（5％）です。
info@hozokan.co.jp 新刊メール配信中！ 送料はご負担になります。

新刊 70人の子どもの母になって
お寺ではじめた里親生活
伊東波津美著
長年の里親生活から、「親子の繋がりや共に暮らし支えあう「家族」のあり方を見つめる。一、二六〇円

心に響く3分間法話 神も仏も同じ心で拝みますか
譲 西賢著
様々なことに振り回されながら生きていませんか。自分の心を見つめなおす法話集。一、〇五〇円

自分の「心」に気づくとき
カウンセリングの対話から
譲 西賢著
対話によって苦しみが解きほぐされる動きを、仏教の教えに照らしながら丁寧に説く。一、六八〇円

気軽に読める 5分間法話 暮らしの中の、ちょっと気になる話
和田真雄著
結婚・子育て・老いなどの、暮らしの中にある身近な悩みを、やさしく解きほぐす。一、〇五〇円

ブッダ八大聖地をゆく
仏教の起源をたずねて
伊藤明麿著
ブッダの誕生から入滅まで、生涯をかけて歩んだ道のり。仏教の八大聖地の臨場感あふれる写真で辿う。二五二〇円

ひとりふたり・・・
お盆を迎える
桂雀々、転んでも大丈夫、長坂知春、追悼を超えて、譲西賢ほか。三〇部以上で割引有り。一三〇円

東本願寺 門徒勤行
CD：1枚 2,835円
カセットテープ：1本 2,100円
読誦：東本願寺御堂衆
仏説阿弥陀経
正信偈草四句目下 ほか

好評 節談説教
講師 祖父江省念
CD5枚組 各セット 税込12,600円

●親鸞聖人御一代記
出家・得度／比叡山での修行／六角堂での示現／念仏停止の法難／ひとつの信心／聖人御往生ほか
●蓮如上人御一代記
ご誕生・ご生母との別れ／比叡山でのご修行／御文の製作／本願寺焼討／木光坊の報恩／御往生ほか
●釈尊御一代記
ご誕生・四門出遊／出家・ビンバシャラ王との会見／苦行・成道・初めての説法／生きつづける教えほか

〒600-8833 京都市下京区七条大宮西入る
市原栄光堂
TEL:075-371-6843
FAX:075-371-8685
＊送料は実費を頂戴いたします。

渡邊顯正著
日蓮聖人の教化法と宗教批判
比叡における修行・研学／日蓮の教化法／日蓮の摂受折伏の思想／四箇の格言について外
定価5250円税込

高橋事久著
迦陵頻
かりょうびん
可能性のある限り／現代教学樹立の問題／念仏申せども／真実信心／釈尊・親鸞の原点を見直す外
定価3150円税込

朝枝善照著作集 第一巻
日本古代仏教受容の構造研究
古代に於ける仏教の受容とその構造／古代仏教史に於ける最澄の位置／日本霊異記に見られる古代社会の仏教受容／解説外
定価9450円税込

SHIN BUDDHIST 8
国際仏教文化協会編 定価1050円税込

600-8342 京都市下京区花屋町西洞院西入
永田文昌堂
電話 075-371-6651
FAX 075-371-9633
振替 01020-4-9033